

いずれの諸師も三心必具を強調する。しかし、三心が一心に納まるということから、往生を願う心あるいは阿弥陀仏助けたまえという心に三心が具するのであるから、三心必具と言っても一心が起きれば良いのである。しかし三心は往生の正因であるからいつ具することができるかは、それぞれの諸師の著作においては在家に対する三心の具し方と出家に対するそれと分けて整理する必要があるだろう。

まず、諸師の出家者に対する三心具足の時期を整理すると次のようになる。

法然はあまり肯定的ではないが智具の三心を分別する。つまり出家者が学問的に三心を解釈し、その価値を見出したとき、三心が具足すると考えることができる。聖光の立場は法然を一步進めて、出家者の役割として智具の三心を挙げている。隆寛は他力に帰し回入したときと言うことができよう。証空は『観経』を尋ね、その心を解釈した瞬間と言うことができる。

それでは在家の人に対しては、どのように言っているであろうか。いずれの諸師も自然に三心が具足するという立場を取っている。三心を知らない人でも具せなければ、この三心は全く価値のないものとなってしまふ。そこで法然の言う行具の三心をその門下も継承していった。聖光、隆寛はその言葉から行に心が具わるといふ傾向が強い。もちろん往生を願う

心で念仏することが重要であることをそれぞれ強調するわけであるが、言葉としては行が優先する形となっている。証空の立場は前の両者と違って、心に行が具するという思想が鮮明である。

いずれにしても念仏の行に、往生しようと思う心あるいは往生できると信じる心に三心が具すると言う。それについては諸師ともに共通する部分である。証空の場合はその思想から往生しようと思うことがまた、領解と言うことができ、そのときに三心が具わったときと解釈することができる。しかし、聖光の場合は三心が具すると信じて念仏することも、また必要であると言うこともできる。そう考えると三心が具する時期が最も早いのは、証空の思想とすることができ。しかし、そこで問題となるのが三心の退不退の問題あるいは念仏に帰したのちの生活であろう。これらの問題について諸師の思想を次に探ってみたい。

●第四節 三心の退不退と念仏生活

法然門下で三心の退不退を問題としているのは聖光である。聖光は行を行うことで心を守ると言い、三心が退く対応策を示していると言える。隆寛は他力に帰すことで入信し、証空は領解することで三心具足するのであるから、基本的に両者は三心の退不退は問題としていないことがわかれる。